

新地三百石

板倉留六郎

本地へ百石加増

板倉貞治

金廿兩并びに麻上下一具

斯て一同の御禮を申上げ退城の後知己親族と打招ぎ
茲に祝宴を開きしが母と姉との喜びの涙や深き惠み
の露恨みも晴し雪の夜の明ればいつか安政の五年と
なりて元旦の門に縁の松飾り實に新玉の年と共に併
せて祝ふ万歳乃鶴と龜との夫ならで爾來兄弟睦まじ

く母と姉との孝を盡し君への忠を專一と盡せし詮の
著るしく愈々昇進せしとなん寔に兄弟の如死の三十
余年の艱難辛苦實に稀なる復讐とこそ言ふべけれ

復讐 美譚 春緑北越名譽下卷畢

春緑北越名譽の後に書す
 久米孝太郎盛治等が父の仇瀧澤の行方を捜さんため
 身の虚無僧六部雲助と扮立就中秦の豫讓が身の古事
 一髪鬻たる乞食とまで身を變ト辛苦艱難雨の日も吹
 雪さへ不撓不屈四十年余變らぬ心の春みどり其濃か
 なりし冥慮に叶ひ宿意を陸奥の祝田濱に達し上故
 郷に飾る襪褌の錦后ちの名譽の寔にも勇まかり
 とかよ然れ此顛末を筆し世に物せる者あらぬもの
 から啻當時仇討を見えたる人々乃評判而已に止まり
 しが今の安政の六とせよを三十年余なれば其が評判

さえ薄らぎて赤子り美譚を没せんと成せり實に遺
 憾なる次第なり予客年の秋短夜の寢氣を耐え残る火
 影を力草當時見してふ老人より耳せし事と故人六原
 翁が筆に係る古書と緋き禿たる筆もて書き染めし一
 筆二筆塵積む如く十余夜の間に一巻の原稿を起して
 孝太郎盛治等が長物語を編めり之を祝田濱復讐實記
 と名け奥羽日々新聞に掲ぐる事といなしぬ然るに這
 回書肆益嶮堂主人之を梓に上さんと欲する由申來し
 故未だ新聞に掲げざりし事共加えて出版さるるを
 を諾む改めて春緑北越名譽然れ諸先生は婉妙の筆

と同視さるゝを恐る唯庸陋の筆を以つて事實を穿ち
 一耳此邊のおん判讀に任せ修樹玉のらんを尙孝太
 郎盛治が現今のお譚あれどコハ新らしくして古く語
 と合するの面白もあれなく春緑外編に筆におん目に
 入れ申すべくひ間何分永當くのお難判ものとも多
 少に不關春緑北越名譽よぞ段々おん購求玉のれさく
 と益嶮堂が弁護められたお饒舌に聲の涸るゝはと筆
 に任せて本書顛末まで修披露まうと侍べるといふ

明治十九年丙戌の春

春永情史東京に僑居に稟す

北越の士 渡邊戸矢右衛門

「春を待つおとや

氷の下九流

「とち乃くの山を

數へる巨燧のな

「東から來たり

今年の初鴉

「土に日の馴染

光りや梅の花

「遠くかとおもひ

そまに梅の月

「夜の空の低う

おもふや花明を

「よい日とて霞の

奥に鐘の聲

久米孝太郎盛治誌

「大君の恵のおくの道ひろく

あきらけく見る松じまの空ら

「木からりの吹にまかせてさけいれは

あしるれたけを折のたま萩

明治十九年三月五日出版御届
明治十九年三月 出版

定價金壹圓

著述人

宮城縣平民

久永連藏

陸前國杜鹿郡根岸村
二百四十七番地在籍

出版人

全縣平民

山口徳之助

全國全郡石巻村
二百八十一番地

本書愛讀諸君にお詫

本書口繪の松嶋及石巻の景色をはしめ其他祝田濱となん云ふ所々を甘く体裁を筆せよと書肆が命ありしも予不幸よして奥羽の地を踏みし事なく適宜寫眞圖畫集なんぞ開き稍々纏めた上春永先生の奥羽の人なれば閱を乞ひまにナト反對ありと然はれ出版急なるに際したるものから今の本意亦くも其儘彫刻に成まぬ定めかんと見苦しき所あらひ開の前書の次第を以て御推闡あらん事を一寸おわび申上候

本書の書工 翠雨謹言





